



東京都世田谷区

川場村長への 特別インタビュー

外山 京太郎 さん

令和3年度、世田谷区と川場村の「区民健康村相互協力に関する協定（縁組協定）」が締結されてから40周年を迎えたことを記念し、特別インタビューとして、川場村長の外山京太郎さんに、世田谷区の小学5年生の川場移動教室や、川場村でできる自然体験のすばらしさについてお話を伺いました。



世田谷の子どもたちの元気な声は、 川場村民にとっても元気のもとです

世田谷区と川場村の交流が続いてきた中で、お感じになられることをお聞かせください。

私が、地元の高校を卒業して、川場村の森林組合に入ったのが昭和57年、世田谷と川場村が縁組協定を結んだ次の年です。移動教室も始まるということで、なかのビレジは浅松山、ふじやまビレジは鉱石山に登るということになっていました。その登山コースの考案を森林組合が依頼をされて、14~15人の区職員の方と学校の先生とで道なき道を歩き、コースの開設をしたことが良い思い出です。

こうして世田谷と川場村の交流が始まったときから、関わってきており、いろいろな場面で世田谷の子どもたちと触れ合う機会は多かったです。

移動教室などで川場村を訪れる世田谷の子どもたちにはどのようなことを感じてほしいですか。

川場移動教室は、今年度は1泊2日で行いましたが、新型コロナウイルスが終息すれば、また2泊3日に戻るのだと思いま

す。3日間を有効に過ごす中で、川場村に四季を通した自然があるわけですから、子どもたちが川場の自然に触れあってもらえるのが一番いいかなと思っています。

川場村での自然体験は、子どもたちの成長にどのような影響を与えるとお考えでしょうか。

小学校5年生が一番多感な時期で、その時に川場に来たということは、大人になってからも、ずっと思い出に残っているといます。飯盒炊さん、山登りを体験して、夜はキャンプファイヤーを行い、最終日にはふじやまビレジ、なかのビレジから田園プラザまで歩くというコースが多いと思います。以前、太田龍之介さんという方が、5年生の移動教室で川場にきました。彼はなかのビレジに泊まって、宮田さんというリンゴ農家のお宅で話を聞きました。そして、夏と冬に4泊5日の自然教室に参加しました。子どもの頃に川場の魅力に触れて、それが縁でいまは川場に移住してきました。リンゴ農家になったんです。それはまさに小学校5年生の体験があったからこそです。そして、このような子どもが2人、3人と増えてくれればと思います。

近年は親子ともに小学校の時に川場の移動教室を経験したことがあるという方も増えています。それについては、どうお感じですか。

道の駅田園プラザは、日々進化を遂げていますが、そこから見える風景は、35年前とそれほど変わってはいません。田んぼには稲があって、その向こうの畑にはリンゴ

があり、こんにゃくがあり、ぶどうがあり、そして山があります。そういった景観が35年ずっと保たれているというのが、川場の貴重価値だと思います。だからお父さんお母さんが子どものときに見た風景がそんなに変わっていないと感じてもらうのが川場の大切なことではないかと思っています。

コロナ禍を過ごす子どもたちについて、お考えをお聞かせください。

コロナ禍によってこの2年間、皆が本当に苦しんでいるのですが、特に子どもたちは運動会が縮小されたり、修学旅行に行けなかったり、通常ならできたことが、このコロナ禍でできなくなっていました。人と一番接したい多感な時期に、「人と接してはだめだ！」という話ですから、これは大変なことだと思っています。

表情がわからない、顔がわからないという生活からコロナが早く落ち着いてマスクを取った生活に戻ればいいなと思っています。マスクを取って、校庭や体育館で遊び、世田谷区の子どもの川場の自然を感じて2泊3日を過ごしてほしいなと思っています。

移動教室の帰る日には子どもたちが元気な声で、ふじやまビレジ、なかのビレジから田園プラザまで歩いてくるわけですよ。そういう子どもたちの元気な声というのは、村民にとっても元気のもとですから、この移動教室はずっと長く続けてもらいたいと思っています。

